



『9月1日は防災の日』

9月1日は防災の日です。1923年に関東大震災が襲って、10万人を超える人の命がこの地震で奪われました。1923年はちょうど100年前ということになります。この地震は小田原沖（相模湾北西部）が震源地でした。地震は同じ場所で繰り返し発生します。この100年間大きな地震は相模湾北西部で起きていないので、非常に警戒されています。地震が起きたのが100年前ということで、実際に関東大震災を経験した人から話を聞くことはむずかしい状況です。

しかし、私は、小学校の時や中学校の時には近所や親戚の人や学校の先生から関東大震災の話はよく聞かされました。私が小学校1年生の時は、1964年でした。震災から41年後です。50代の先生は、よく関東大震災の経験を避難訓練の時などに話してくれました。ですから、私にとっては、関東大震災は歴史上の出来事でなく、実際に目の前で話している人が被災した生きた出来事として話を聞きました。「すごかったよ！お昼の支度をしていたら激しく揺れて、何もできなかった。家の瓦屋根が音を立てて滑り落ちてきた。外に避難したら地面が割れていた。怖かったよ、余震も続いたから、近くの竹藪に逃げ込んだんだよ。地震の時は竹藪が安全なんだよ。」などと隣のおじいさんが話してくれた。地震の話は毎回、何度聞いても同じはなしの繰り返しでしたが、何回聞いても怖いなと思いました。友達のおばあさんから、「地震の後に、朝鮮の人が日本人を襲ってくるという噂が村に広がり、みんなで竹槍を用意して警戒したんだ。その噂があったので、地震の後にこの塀を家の周りに立てたんだよ。実際は朝鮮の人は襲ってなんかこなかったけどね。」と話を聞いて、村で自警団のようなものが組織されたことに小学生ながら恐ろしいと思いました。地震の混乱が人々の正常な理性や感性を狂わしてしまうんだなと思いました。

100年という歳月は、人間の寿命のほぼ限界のラインでもあります。100年が人々の生きた経験を語られる限界のラインであるわけです。関東大震災を実際に目の当たりにして、それを記録している人はほとんどいないことを100年は意味しています。実際に体験した人がいなくなると歴史は書き換えられることも多くなります。都合の悪い話、触れられたくない話は、無かったことにしてしまうことも考えられます。なぜなら、そのことを体験した人はどこにもいなくなるからです。震災後に「朝鮮人が襲ってくる」というデマは、小田原市鬼柳だけでなく、東京や横浜などの都市部でも広がり、実際に朝鮮の方が殺害された事件が発生したことを私は大学の授業で初めて知りました。しかし、100年経った今、その出来事もだんだん風化されているような気がしています。私は、小学校の時に「朝鮮人が襲ってくる。から自警した。」という話を近所のおじいさんやおばあさんから聞きました。私たちはさまざまなことを先人から聞いて、そしてそれを次の世代に伝えていくことが大切だと思います。100年経つと歴史が書き換えられる恐れがあることを忘れてはならないと思います。そのためにも、おじいさんやおばあさん、お母さん、お父さんなどからあなた方が生まれる前の様子や出来事をたくさん聞くことが大切だと思います。

関東大震災の写真



小田原駅



小田原市国道 1 号線

国道 1 号

